曽田先生から教えられたこと

宇田　敏子

秋のある日、ロゴの印刷されていない真っ白い封筒が送られてきました。その裏面には大学名と学部時代の恩師、水羽先生の名が印刷されていました。

これまで終了した広島大学から届く封筒すべては大学のロゴが印刷されていました。それが今回は違っていたのです。何事が起きたのだろう……と思って恐る恐る封を開けました。なんとそこに書かれていたのは「曽田三郎先生退職記念行事」だったのです。

曽田先生にはじめてお会いしたのは社会人大学生として学部を卒業し、院生として入学する試験の時でした。先生の研究室で行われた面接試験のとき、他学部からの入学生に対して憂慮されていたことを思い出します。

それも無理のないことでした。というのも中国近代史を専攻するにもかかわらず、漢学の素養があまりなかったのです。

入学後、先生は特別に他の先生のその授業科目の講義を受けるよう手配してくださいました。それは出身学部の先生の科目の講義にも及びました。さらに曽田先生自らも中国近代の文語文で書かれた文献の翻訳をメールでやり取りしてくださいました。

当時 93 歳になる親を介護しながら通学していました。その配慮からいろいろと策を講じて下さったのです。今でもその当時のことを思い出すたび、心からありがたく感じます。

先生の人に対する優しさは修論の最終の面接試験の時間確認にもありました。面接試験の掲示してある印刷物の文字が小さくて見えにくかったのです。先生はそれもまた察知され自らその下に椅子を持ってきてくださり、それに上がって確認するようにとまで言ってくださったのです。

それまで長く生きてきました。でもそこまで人から親切にされたことはありませんでした。恥ずかしながら、先生の差し出してくださった椅子に上がって試験の時間を確認しました。いくら修論がよく書けていてもその時間に間に合わなければすべては終わりとなるからです。本当にありがたかったことを覚えています。

さらにその優しさは修論発表の場でもありました。その日、学部生に混じって院生として修論を発表しました。学ぶことに関しては老若男女の別は関係ありません。当然厳しい質問が飛び交います。

それもどうにか終わる頃、先生は最後の言葉を話されました。いろいろと修論に関する注意と課題を聞いた後、曽田先生は「もう一つの仕事をしながらここまでやりました…」とねぎらいと励ましの言葉を言ってくださったのです。「もう一つの仕事」について、はっきりとは言われませんでした。でもそれは先生の眼を見て聞いているうち「母の介護」のことだとすぐわかりました。今でもその光景が浮かんできます。

修論発表の打ち上げのとき、もっと学びたいと話すと「研究生で…」と言ってくださいました。

それも母の介護で物理的に無理でした。その母からも解放された矢先に先生の退職を知りました。

2年間という短い期間でした。曽田先生からは学問と同時に人に対する優しさも教えていただきました。ほんとうにありがとうございました。

曽田先生、ますますのご活躍をお祈りいたします。

（うだ　としこ　博士課程前期 2008 年度修了生）

力群「土機織布」『延安文芸叢書』美術巻より